

## Ⅱ 事業報告

# 桂離宮松琴亭襖ほか修理工事

### 1 施設概要

桂離宮は、17世紀初頭、元和年間に後陽成天皇の弟に当たる八条宮智仁親王<sup>としひと</sup>によって別荘として創建され、二代智忠親王<sup>としただ</sup>及び三代穩仁親王<sup>やすひと</sup>による増改築を経て、今日の桂離宮の全容が完成した。その後、八条宮は、常磐井宮、京極宮、桂宮と改称され、十二代淑子内親王<sup>すみこ</sup>が明治14年（1881）に薨去されたことにより廃絶となり、明治16年（1883）より桂離宮として宮内省が管理することとなった。



図1 松琴亭（外観1）

現在の桂離宮は、書院と四つの茶屋から構成され、中池を中心とする広大な池泉回遊式庭園のなかに、それら建築物が見事な調和をもって配置されており、屋内と四季折々の風情をもつ庭が一体となった日本の伝統的な建築空間が広がっている。

本工事の対象である「松琴亭」（図1）は、茅葺を中心とする屋根に面皮柱や土壁、水屋を配した草庵風の外観（図2）ながら、室内は藍と白のコントラストが美しい「石畳模様」（市松模様とも呼ばれる）の襖や張付（床の間等に直接張る壁紙）が洗練された印象を与える建物で、その意匠は、現代でも高い評価を得ている（図3、4）。建物の規模は、正面約12m、奥行約11m、高さ約6mとなり、屋根形状は、主屋（一の間、二の間）部分が入母屋造茅葺、茶室が切妻造柿葺となり、それらの背面は、片流れ屋根棧瓦葺となる（図5）。

その他にも、狩野探幽が画いたとされる小襖、天袋付きの違棚、麻の茎を縦に敷き詰めた欄間等、数々の趣向を凝らした意匠が、訪れる人々の目を楽しませている（図3、4）。



図2 松琴亭（外観2）



図3 一の間



図4 二の間



図5 松琴亭屋根形状

## 2 工事に至る経緯

桂離宮における大規模な修理工事には、「昭和の大修理」と呼ばれる昭和51年～昭和57年にかけて行われた古書院・新御殿等の解体修理事業と、昭和60年～平成3年にかけて行われた松琴亭を始めとする茶室の解体修理事業があり、松琴亭の襖や壁面張付は、後者の事業のうち、平成元年に本紙及び下張り紙等が新調された。現在、その修理工事からすでに約30年が経過して、経年による退色や傷みが著しいことから（図3、4）、平成29年度より、本工事を行うこととなった。

## 3 工事内容

### 3-1 工期と工程

今回の修理工事は、工期を平成29年9月9日から平成30年3月30日とした。工程は、表1のとおり、紙の調査、奉書紙の製作、藍染め作業、襖の修理、修理後の点検を実施した。そのうち、紙の調査は当事務所管理課文化財管理室が行い、奉書紙の製作（紙漉き）は山喜製紙所（福井県）、藍染め作業は紺九（滋賀県）、襖修理（紙選定、張替）は松村泰山堂（京都府）が行った。

なお、本工事を行うに当たり、「昭和の大修理」を当庁技官として担当された斎藤英俊氏（京都女子大学家政学部教授）に、平成29年6月～平成30年3月までの間、計3回桂離宮現地において、材料の選定を中心にご指導いただいた。

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
紙の調査	●—●						
奉書紙製作(藍紙)	●—●	●—●	●—●				
奉書紙製作(白紙)		●—●					
藍染め作業		●—●					
襖修理				●—●	●—●	●—●	●—●
点検							●—●

表1 工程表（工期：平成29年9月9日～平成30年3月30日）

### 3-2 工事箇所

今回の修理対象となる襖と張付の種類は3種類で、図6に示したように、藍白奉書石畳張りは一の間、藍染奉書張りは二の間と次の間及び勝手の間、奉書張り（白色）は茶室と勝手の方にそれぞれ設置されており、全5室37面の新調を行った。

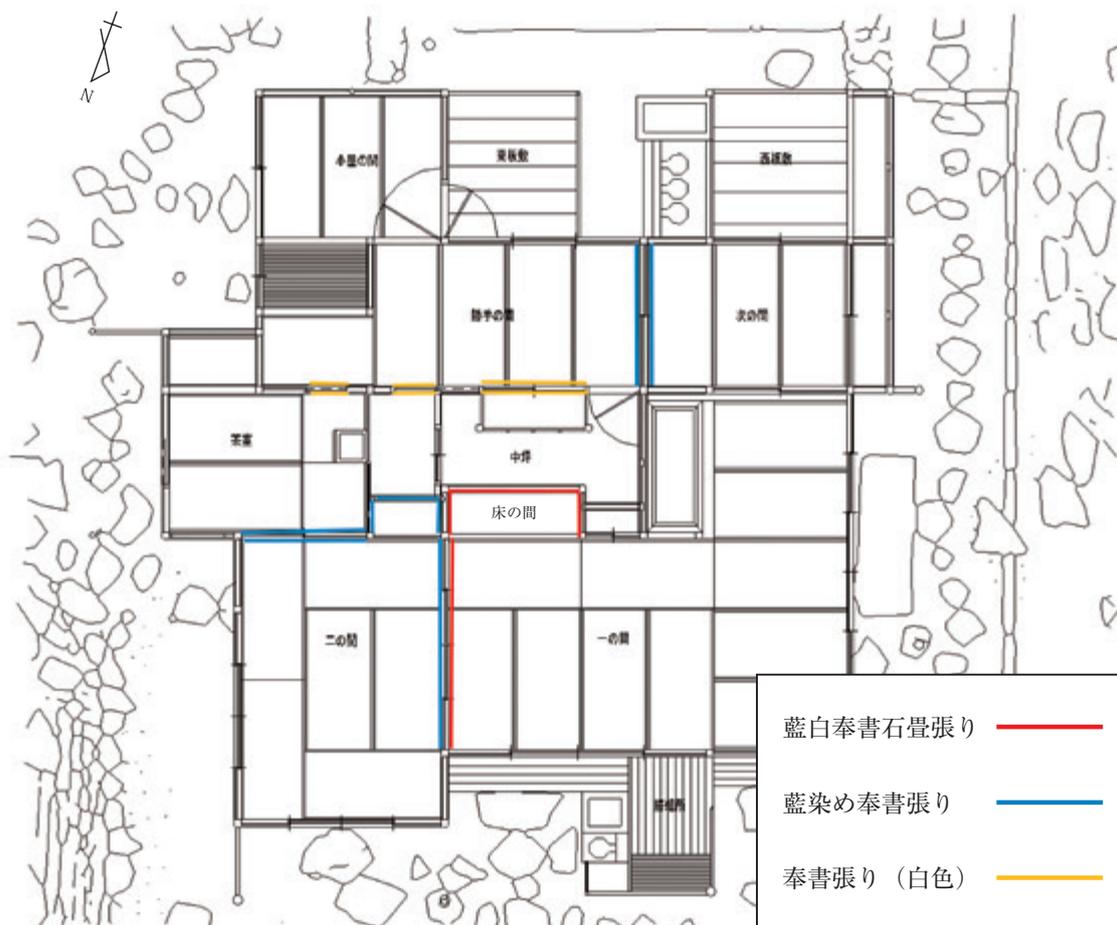


図6 松琴亭平面図（工事箇所）

## 4 材料の選定と技法

今回の工事において、新調する紙の材料や技法は、保存科学分野を中心とする調査・研究成果に基づいており、材料や技法の選定の根拠については研究報告として別にまとめている（P100 長崎紀子「桂離宮松琴亭の襖・床壁の紙について」参照）。そのため、本報告は、全体の工事内容の把握を目的とし、選定の経緯を簡潔に記すにとどめる。

#### 4-1 従前の修理

年代	資料名	紙	染色方法	備考
昭和34年度	桂離宮御殿其他襖及壁紙張替工事仕様書	越前奉書	浸し染め	漉き返し並びに黒谷奉書も検討したが、浸し染め・越前奉書を選択
昭和63年度	桂離宮茶室等整備記録	越前奉書	浸し染め	漉き返しを検討したが、前回は踏襲し、浸し染めで施工

表2 修理履歴

松琴亭の襖等の紙の種類や染色方法について、その仕様を明確に示す資料は、意外にも極めて少ない。修理記録において、その仕様が比較的明らかなのは、前述の昭和63年度の修理のほかに、昭和34年度の工事が挙げられる(表2)。それらを参照すると、いずれも紙は越前奉書を用い、藍色の奉書紙の染色方法として、浸し染めが採用されていたことがわかる。

#### 4-2 材料の選定

本工事における紙の選定は、①伝統的に使用されてきた原材料を使用すること、②伝統的技術または技法によって製造されていること、③一定の地域で、ある程度の規模の製造者があり、地域産業として成立していること、以上3点を基本要件とした経済産業大臣が指定する「伝統的工芸品」に指定された「越前奉書」を使用することとした。なお、上記(4-1参照)のとおり、過去2度の修理の際にも、同奉書紙が使用されていることも考慮した。

#### 4-3 技法

染色方法につき、過去2度の修理の際には「浸し染め」とされたが、今回は調査・研究成果を受けて、「藍染漉き返し」の技法を用いることとした。藍染め漉き返しとは、奉書紙を藍染めした後に、水につけて叩きほぐし、再び漉く伝統的技法(5-2参照)で、色むらがないうえに、退色しにくい技法である。この特性は、松琴亭の建物の性質上、直接外気に触れ、ほぼ自然状態で保存公開されている襖等にとっては、非常に重要な点である。

また、史料の調査によって、『智忠親王消息』、『智忠親王詠草』(ともに宮内庁書陵部所蔵)に一部使用された智忠親王御直筆の薄藍色紙が、漉き返し紙であることが確認されたことにより、松琴亭造営と同時代に藍染漉き返し紙が使われていたことが判明した点、昭和の大修理の際、御殿の壁面から紺色の漉き返し紙の断片が発見され、古書院「御役席」の壁紙が藍染漉き返しで復元された点などを考慮して、今回の技法では、漉き返しを選択した。

## 5 修理工程

### 5-1 全体の流れ

修理工事の全体の流れとしては、まず白色及び藍色漉き返しの奉書紙を製造し、それらを用いて襖・張付の張り替えの作業を行う(図7)。藍染奉書の製造について、一般に漉き返しとは、藍壺に漬けて染めた奉書紙を、染めきれない部分(紙の内部)も含めて一旦叩きほぐし、さらにそれを漉き直す(漉き返す)ことで色を均一化させる手法である。そのため、漉き返す前の浸し染めの状態に比べて、仕上がりの色味が薄くなるという側面がある。そこで、今回は通常の半分の厚さで紙を漉き(これを「半漉き」という)、藍を紙内部に浸透しやすくすることにより、染めきれない部分ができるだけ少なくなるようにした。また、前回修理の色調に近づけるため、浸し染めは10度にわたり漬け込んでいる。

次に、奉書紙の製造と、襖・張付の製造について、工程順に見ていく。

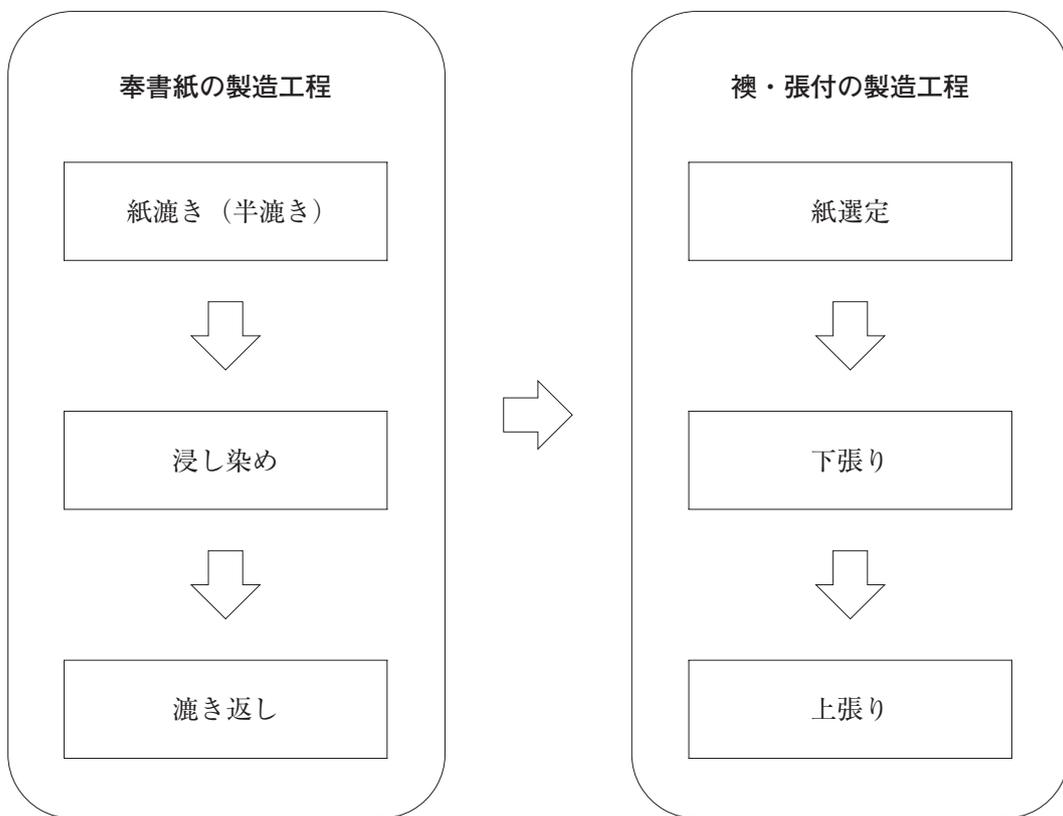


図7 製造工程

## 5-2 藍染め奉書紙の製造工程

本工事では、藍紙及び白紙を使用するが、ここでは藍紙の製造工程を紹介する。

### ① 紙漉き（半漉き）

楮の繊維を叩き解し（図8）、紙料を簀笥すげたですくい上げ、通常の半分の厚さで漉く（図9）。



図8 繊維を叩き解す様子



図9 紙漉きの様子

### ② 紙を藍で染める

藍染工房にて奉書紙を藍液につける。空気により酸化させ、再び藍液につけ込み、乾かす作業を10回繰り返す（図10）。その後、地下水を使用し、水洗い（水中酸化）を行って灰汁を流し（図11）、それを自然乾燥させる（図12）。



図10 浸し染め（10回目）



図11 灰汁を洗い流す様子



図12 自然乾燥

③ 叩解こうかいする

藍に染まった奉書紙をお湯につけ込み、繊維状になった奉書紙を打ちたたき、再度溶かす。こうした作業を叩解と呼ぶ（図13）。



図13 叩解の様子

④ 紙漉き（漉き返し）

液状化した奉書紙を簀桁ですくい上げ（図14）、濃い藍色の液の中で厚さを揃えた紙を漉く（図15）。



図14 簀桁で紙を漉く様子

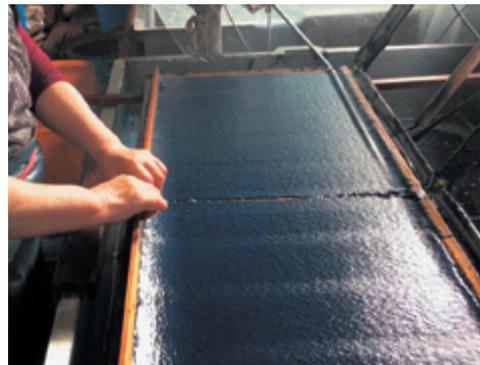


図15 漉き終わった紙料

⑤ 板干し・乾燥

漉き上がった紙一枚一枚を重ね合わせ乾燥させる。

5-3 襖・張付の製造工程

① 本紙の捲り取り

引手金具並びに周囲の四分之一しぶいち（本紙を壁面に設置するための細長い木材）・塗縁等を丁寧に取り外す。

上張り本紙の隅から平竹篋を入れて、下張りとともに捲り取る。解装後の上張り本紙はすべて保存するため、損傷のないよう丁寧にめくる。

## ② 下張り捲り

下張りの交換は、本紙を長期にわたって良い状態に保つために行われる。そのため、下張りを捲る作業も慎重に行う。

## ③ 調査

下地骨の傷みや、下地材への書き込みの有無等、外からは見えない状態や情報を確認する。今回の修理過程において、襖の下地骨への泥の付着や、天地逆さまにして下地骨が再利用されていたことが判明するとともに、下地材の劣化が進行していることが確認された。泥の付着は、災害時の桂川の氾濫による建物内部への浸水を示す痕跡である可能性が指摘できる（図16、17）。したがって、今回はその史的意義を優先し、泥の付着や下地骨の向きは現状のまま使用することとした。しかし、材料のさらなる劣化は免れないため、次回の修理では、下地骨の新調を検討することが必要であるとみられる。



図16 茶室内水没ライン



図17 下地骨への泥付着状況

## ④ 下張り

十分な乾燥ののち順次入念に張り重ねる。

なお、下張り層の説明については、P29「京都御所障壁画修理工事」を参照のこと。

## ⑤ 上張り

今回の藍紙は、漉き返しにより色が平均化されたものであるが、張り込んだ際に、より美しい仕上がりとなるよう、トレース台を用いてわずかな色の濃淡を確認し、選別する（図18）。また、紙の繊維にも気を配り、その方向を揃えたうえで配置を計画する。

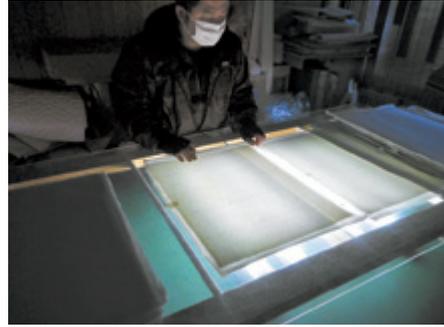
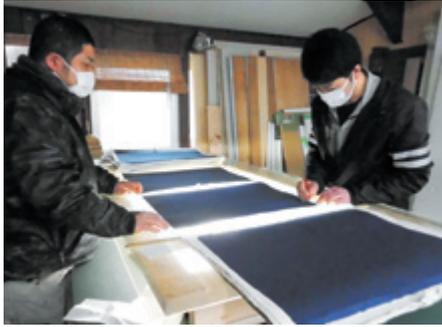


図18 紙選別の様子

紙の選別後、和紙での裏打ちを施した後に、調査工程で確認できた奉書紙の大きさに切断し（図19）、浸し染め奉書紙と白の奉書紙を、下張りの上に張り重ねていく。その際、下から上へ、左から右へ3分（約9mm）程度を重ねて張り合わせ、紙の伸縮にも気を配りながら行う（図20）。



図19 紙裁ちの様子



図20 張り上げる順序

## ⑥ 金物取付け

番付のとおり、同じ箇所金物を取り付ける。

## ⑦ 建込み

番付のとおり、元の位置に丁寧に填め込む。

## 6 おわりに

今回、桂離宮松琴亭の襖・張付壁を対象として、7箇月間にわたって修理工事が行われた。藍の漉き返し紙を用いた石畳模様を中心とする新しい襖や張付は、松琴亭とそれを包み込む苑池に、再び鮮やかな色彩をもたらした（図21～24）。今回の修理では、伝統技法である紙漉き及び藍染めの確かな技術が十分に活かされているとともに、耐久性に優れた藍染め紙の追求を試みている。今日まで大切に受け継がれてきた美しい桂離宮を末永く後世に伝えていけるよう、今後も経年変化を注意深く見守り、より適切な維持管理を目指して努めていきたい。

完成写真



図21 一の間 (施工後)



図22 二の間 (施工後)



図23 茶室 (施工後)



図24 勝手の間 (施工後)

(管理課 山本徹也・石川明良)